



蜻蛉日記解釈大成

第4卷

上村悦子 著

明治書院

著者略歴

上村悦子 (うえむら えつこ)

京都市生まれ。

昭和八年 日本女子大学大学本科学部国文学科卒業

現在 日本女子大学名誉教授

文学博士

著書 『更級日記 (後注)』 (昭和27年)

『万葉集 現代訳と鑑賞』 (昭和28年)

『万葉名歌』 (昭和31年)

『蜻蛉日記 校本・書入
諸本の研究』 (昭和38年)

『蜻蛉日記の研究』 (昭和47年)

『王朝女流作家の研究』 (昭和50年)

『蜻蛉日記 全訳注 (上・中・下)』 (昭和53年)

『万葉集入門』 (昭和56年)

『赤染衛門』 (昭和59年)

現住所 〒175 東京都板橋区高島平3-10-8-201

蜻蛉日記解釈大成 第4巻 定価 6,800円

昭和63年5月10日 印刷

© 1988 Etsuko Uemura

昭和63年5月15日 発行

Printed in Japan

著者 上村悦子

発行者 株式会社 明治書院

代表者 三樹彰

印刷者 大日本法令印刷株式会社

代表者 田中忠



発行所 株式会社 明治書院

東京都千代田区神田錦町1-16 郵便番号101

電話 (03) 292-3741 (代) 振替口座東京3-4991

ISBN4-625-51120-8

星共社製本

凡 例

一 本文について

一、「本文」は宮内庁書陵部蔵桂宮本「蜻蛉日記」上・中・下三巻を底本とした。ただし、適宜漢字をあてたが、その場合必ず漢字に振り仮名を施した。振り仮名のない漢字は底本が漢字であることを示す。

二、底本の誤脱と認められる個所は、他本・諸家の考勘を参考にし、あるいはさらに筆者の私見を加え、最も妥当と思われる本文に改訂した。その場合、右傍に・を付し、「本文整定」の項の——の下に底本の形を示した。

三、歴史的仮名遣いに相違する個所、単語を異にする繰り返し符号（踊り字、宛字として用いられた漢字は改めたが、その右傍に底本の字を書き記した。

四、底本の送り仮名・助詞などで不足の文字は本文に補い、右傍に・を付して底本に欠けていることを示し、本文整定にも入れた。

五、適宜、段落を分けて改行し、その上にまとまった大きい段落を設けて、それには小見出しと、全巻通じての通し番号を付した。また、句読点・濁点を付し、会話や消息の部分、引

歌などには「」を施した。

六、底本の傍注・傍記は省略したが、「語釈」のところで触れておいた。

二 「語釈」について

一、「語釈」は原則として、次に掲げる諸本の「語釈」「頭注」「脚注」に書かれた解釈をとりあげて、ほぼ出版年月日の順にあげていったが、時には通釈や現代語訳にあるものを使つた場合もある。補注や追記もなるべく入れた。ただし、既にあげた解釈とはほ同じであったり、修辭技巧や入勅撰集の指摘、及び歌・詞書、さらに引歌があげられている場合、記事が幾度も重複するので、「同上」と記したり、省略した場合もある。また簡潔にしたり、「前掲の如く」としたり、あるいはまとめて簡素化をはかった。参考の歌や他作品の例など、初句と歌集、番号のみをしるし省略した場合もある。特に【集成】の場合は再校の段階で入れたので、第一巻目のみは余白のある所に主として入れることになり、長い文は省略する結果になりおわび申し上げる。

二、仮名遣いも諸本の通りに書き写したので、【解環】ははじめ

【補遺】【全訳王朝】【物語日本文学】【平安朝女流日記の鑑賞】
 【講義】【現代平安朝女流日記】【新蜻蛉日記】なども現代仮名遣いでない場合があるが、漢字は原則として常用漢字の字体に改めた。【注解】【抄】は本文以外は現代仮名遣いであるが促音「っ」は普通の活字の大きさになっているので両本とも小字に改めた。

三、句読点はほぼ原本どおりに付けたが、あまり多い場合は少々省略した場合もある。【補遺】【紀行解】など句末に句点がない場合もあるが、語釈の末尾には句点も入れた。

四、同じ見解の場合、重複するので後に出た本の方は先に出た本のところに記すが、先の本の方の言葉や仮名遣い、文字を用いた。例えば【講義】【探究】の場合、講義の言葉を出した。従って歴史的仮名遣いである。

五、語釈の中に出て来る書名の「『』」は、改めたりあるいは省略した場合もある。またルビを省略した場合もある。六、【物語日本文学】の訳が【全訳王朝】の訳とほぼ同じ場合は前者を省略した場合がある。

七、【講義】と【全講】や【新蜻蛉日記】の説明がほぼ同じ場合、また、【新釈】と【新注釈】の説明がほぼ同じ場合、【講義】や【新釈】をあけて、【全講】や【新蜻蛉日記】また【新注釈】を「同じ」と書いたり省略した場合がある。

八、【大系】の語釈中、『倭名類聚鈔』や『類聚名義抄』などを引用する場合、漢字の下に、よみがなが書いてあるが、本書

では大体、漢字の傍記に改めたことをおことわりしておく。ただし第二巻目以降ではなるべく本文どおりにした。

【例】 函フミハコ → 函（倭名）

咳嗽シハフキ → 咳嗽（字類）

九、語釈の時、見出し以外の訳がはいる場合、その部分を（）に入れておいた。

【例】 まめ文 【全集】表向きの文通（をくりかえして）。

十、【補遺】【紀行解】の語釈は第四巻には全部入れた。ただし【補遺】の語尾は簡潔にした場合もある。また適宜に句読点を施した。

十一、直接関係のない例などは省略した場合もある。

十二、和歌の通釈は【全訳王朝】や【物語日本文学】のもの入れたが、語釈は必要に応じて採択した。ただし、長歌は省略した。

十三、◇を付して諸氏の見解をあげた場合もある。

十四、私の見解は【注解】とほぼ同じであるが、相違する場合は◆を付してあげたり、また通釈でも示した。

十五、【語釈】に掲げた語本は左のものである。頭部に略称をあげた。ちなみに版を重ねたものはなるべく新しい版のものを用いるよう心がけた。

【解環】 坂徹『蜻蛉日記解環』折口信夫編輯『国文学註釈叢書』六 名著刊行会

【補遺】 田中大秀『蜻蛉日記解環補遺』（仮称）吉沢義

則編纂『未刊国文古註釈大系』第十三巻 清
文堂

【紀行解】 田中大秀『蜻蛉日記紀行解』右と同じ。

【全訳王朝】 吉沢義則博士『^全王朝文学叢書』第十一巻

所収の『かげろふの日記』 王朝文学叢書刊
行会

【物語日本文学】 『物語日本文学』第八巻所収の『蜻蛉
日記』上・下 至文堂

【現代訳】 雅川渥氏『蜻蛉日記』（現代訳日本古典所収）
小学館

【講義】 喜多義勇氏『蜻蛉日記講義』 至文堂

【現代平安朝女流日記】 与謝野晶子『蜻蛉日記』（飛龍文
庫4『現代平安朝女流日記』所収） 非凡閣

【学燈文庫】 関根慶子博士『紫式部日記・蜻蛉日記』
（学燈文庫）（抜粋である） 学燈社

【大系】 川口久雄博士校注『かげろふ日記』（日本古典
文学大系所収）昭和六十年十月五日第二八巻

岩波書店

【川口氏】 「かげろふ日記評釈」（『国文学 解釈と教材の研
究』昭和35年4月号より36年1月号まで） 学燈社

【探究】 村瀬英一氏『蜻蛉日記の探究』（抜粋である）
有朋堂

【新釈】 次田潤博士・大西善明氏『かげろふの日記新

【全講】 昭和三十五年七月十日第一版 明治書院
喜多義勇氏『全講蜻蛉日記』 至文堂

【萩谷氏】 「関の山路あはれあはれとおぼえて―蜻蛉日記
本文に対する対照法解釈の適用―」（『国文学 解

釈と教材の研究』昭和38年2月号） 学燈社

【注解】 秋山虔氏・木村正中氏・上村悦子「蜻蛉日記
注解」（『国文学解釈と鑑賞』昭和37年5月号より
46年3月号まで） 至文堂

【全注釈】 柿本奨氏『蜻蛉日記全注釈』上巻・下巻 角
川書店

【抄】 三宅清氏『かげろふ日記抄』（抜粋である）
著者蔵版

【訂蜻蛉日記】 喜多義勇氏校註『訂蜻蛉日記』（日本古典
全書所収） 朝日新聞社

【新注釈】 大西善明氏『蜻蛉日記新注釈』 明治書院

【全集】 木村正中氏・伊牟田経久氏校注・訳『蜻蛉日
記』（日本古典文学全集所収）昭和四十八年三月
三十日第一版 小学館

【全評解】 村井順博士『かげろふ日記全評解』上・下
有精堂

【対訳】 増田繁夫氏訳・注『かげろふ日記』（対訳日本
古典新書所収） 創英社

【集成】 犬養廉氏校注『蜻蛉日記』（新潮日本古典集成

所収 新潮社

その他、丸山雄二郎氏の『平安朝女流日記の鑑賞』（古典文学叢書、山岸徳平博士の『日記文学』（国文学習叢書、また原田芳起博士の『平安文学研究』所載の「蜻蛉日記私注」の諸論文はじめ諸先輩・畏友の数多くの論文に記載されたご見解をあげさせて頂いた。

十六、「蜻蛉日記注解」は以前九十九回にわたって『国文学解釈と鑑賞』に畏友秋山虔氏と木村正中氏と共同執筆させて頂いたので、私の見解の中心をなす上、底本はじめ主要伝本の校異も丹念に紹介してあるので、ほとんど全部あげた。次に伝本名並びに略号をあげておきたい。

底―底本・宮内庁書陵部本

阿―阿波国文庫旧蔵本

松―島原松平文庫本

上―国会図書館上野支部本

彰―彰考館本

急―大東急記念文庫本

無―無窮会神習文庫本

（第一類B系本―阿・松・上・彰・急・無）

吉―吉田幸一博士蔵本

（第一類本―底より吉まで八本）

萩―東京大学蔵萩野本甲本

見―松下見林旧蔵本

教―東京教育大学本

京―京都大学本

（第二類本―萩より京まで四本）

岡―岡倉氏旧蔵本

学―学習院本

沢―京都女子大学蔵吉沢氏旧蔵本

東―東京大学蔵南葵文庫本

小―東京大学蔵萩野本乙本（小語文庫旧蔵本）

静―静嘉堂文庫本（青木信賢本）

永―日本大学蔵永森氏旧蔵本

（第三類本―岡より永まで七本）

版―元禄十年版本

他は前掲と同じ。

【解環】は国文学註釈叢書（六）により、曖昧な字は架蔵版本の「蜻蛉日記解環」Ⅱ六冊と「かけるふ乃日記解環」凡例ⅠⅡによった。

【補遺】【紀行解】は未刊国文古註釈大系（第十三巻）による（念のため飛騨高山の香木園在那文庫で木村正中氏と一緒に全部写真に取めたのを参照）。

三 通釈

四 鑑賞・解説

一、三・四とも拙著『蜻蛉日記全訳注』（上・中・下）講談社、

昭和六十二年第六刷のものを基にして修正を加えつつ私見を述べた。

五 補注

- 一、本文読解に役立つような事項をとりあげて委しく解明した。
- 二、また「語釈」の項に入れられなかった方々のご見解もあげた。さらに『形成』に掲載されている篠塚純子氏のご論文はじめ蜻蛉日記の内容を理解するのに有効なご論文もあげさせて頂いた。

もくじ

天禄元年（承前）

七十五	唐崎祓 (一)	一
七十六	唐崎祓 (二)	五八
七十七	軒端の苗	一三五
七十八	貞観殿登子と歌の贈答	一六五
七十九	道綱鷹を放つ	一九七
八十	盆供養届く	二一〇
八十一	兼家の通ひ所	二二一
八十二	石山詣で (一)	二四九
八十三	石山詣で (二)	二六一
八十四	石山詣で (三)	二〇六
八十五	相撲のころ	三九二
八十六	兼家の狂態	四二四
八十七	道綱の元服	四三四
八十八	大嘗会のころ	四四三

八十九 年の暮.....	四七一
--------------	-----

あとがき.....	四〇三
-----------	-----

天祿元年（承前）

七十五 唐崎祓（一）

かくながら廿余日になりぬるこゝち、せむかた知らず、あやしくおきどころなきを、いかで、涼しき方もやあると、心も延べがてら浜づらの方に祓へもせむと思ひて、唐崎へとてものす。寅の時ばかりに出で立つに、月いとあかし。我がおなじやうなる人、またともに人ひとりばかりぞあれば、たゞ三人乗りて、馬に乗りたるをのこども七八人ばかりぞある。賀茂川のほどにて、ほのくくと明く。うち過ぎて、山路になりて、京に違ひたるさまを見るにも、この頃のこゝちなればにやあらむ。いとあはれなり。いはむや、せきに到りて、しばし車とどめて、牛かひ。などするに、むな車ひきつけて、あやしき木こりおろして、いとを暗き中より来るも、こゝちひきかへたるやうに覚えていとをかし。関の山路あはれくと覚えて行先を見やりたれば、行へもしらず見えわたりて、鳥の二つ三つゐたると見ゆるものを、しひて思へば釣舟なるべし。そこにてぞ、え涙はとどめずなりぬる。いふかひなき心だにかく思へば、まして異人はあはれと泣くなり。はしたなきまで覚ゆれば、目も見合せられず。

行先多きに、大つ(おほ)のいとものむつかしき屋(や)もの中にひき入りにけり。それも珍(めづ)らかなるこゝちして行き過(す)ぐれば、はる／＼と浜(はま)に出でぬ。来し方を見やれば、湖(うみ)づらに並びて集りたる屋(や)もの前に、舟(ふね)どもを、きしに並(なら)べ寄せつゝあるぞいとをかしき。こぎ行きちがふ船(ふね)どももあり。いきもて行く程に、巳(み)の時はてになりたり。しばし馬(うま)ども休めむとて、清水(しみず)といふ所に、かれと見やられたる程に、大きな棟(おほ)の木たゞひとつ立てる陰(かげ)に、車(くるま)かき下して、馬(うま)ども、浦(うら)にひき下して、冷しなどして、「こゝにて御破子待ちつけむ。かの崎(さき)はまだいといとほかめり」といふ程に、をさなき人ひとり疲れたる顔(かほ)にて寄りゐたれば、糸袋(えいぶくろ)なる物とり出でて食ひなどする程に、破子持て来ぬれば、さま／＼あかちなどして、かたへは、これより歸りて、「清水にきつる」とおこなひやりなどすなり。

さて、車(くるま)かけて、その崎(さき)にさし到り、車(くるま)ひきかへて、祓(はらへ)しに行くまゝに見れば、風うち吹きつゝ波高(たか)くなる。行きかふ舟ども、帆(ふ)引き上げつゝいく。浜(はま)づらに、をのこども集り居て、「歌仕(うたつか)うまつりてまかれ」と言へば、言ふかひなきこゑ引き出でて、歌ひて行く。

祓(はらへ)の程に、けたいになりぬべくながら来る。いと程狭(ほどせま)き崎(さき)にて、下の方は、水際(みづぎは)に車立てたり。あみ下したれば、しき波(なみ)に寄せて、名残(なごり)には、無しと言ひふるしたる貝(かひ)もありけり。後なる人々(しり)は、落ちぬばかりのぞきて、うちあらはすほどに天下に見えぬものども、取りあげまぜてさわぐめり。若き(わか)をのこも、程(ほど)さし離れて並み居て、「さゝなみや志賀の唐崎(からさき)」など例(れい)のかみこゑふり出だした

るも、いとをかしう聞えたり。風はいみじう吹けども、木陰無ければ、いとあつし。いつしかし水(清水)にと思ふ。ひつじのをはりばかりに、果てぬれば、帰る。

本文鑑定

我がー我 見るにもーみなにも せきーとき 牛かひ、などーうしかあかえなと あやしき木こりーあやしきこり
関の山路ーせきの□ち 二つ三つー二三 はしたなきーはしたるき 多きにーおほるに 大つ(津)のーおほへの きしにー
きたに ござ行きーうきゆき いきもてーいにもて ひとりーひかり する程にーすほとに きつるーけつる 帆
引き上げーをひきあげ けたいーけいた あみーみな 天下にー天下 かみごゑーかみうゑ いとあつしーいつあへ
し いつしかし水ーいつらかみつ ひつじの(末)をはりばかりにーひとしのおりはきに

語釈

○かくながら 【補遺】辛崎の祓の事。【紀行解】此紀行は殊に誤脱錯置と見ゆる処ありて未解得ざる処多かれど心の限を尽して臆説を記おきつ。「かくながら」前条を受たる言なり。【講義】そのまゝ。【川口久雄氏】「かげろふ日記評釈・四」『国文学』昭和35年4月) こうして訪れも便りもうちたえたままに。【抄】【対訳】「かくながら……唐崎へとて物す」前項につける。【集成】こんな状態のまま。

○廿余日になりぬる 【紀行解】廿日あまりに言々は六月のなるへし。なりぬるのる字衍か如し哉の意を含たる辞歟又下のこゝちへ続きたるにも有へし。【講義】六月の下旬になつ

たのである。【川口氏】六月の廿日すぎにもうなつてしまつた。連体形終止では、上に「ぞ」「なん」「や」「か」などの係助詞をともなうが普通であるが、ここはそれがなくて終止をあらわす。「廿よ日になりぬ」という単なる終止形どもよりも余情があつてやや婉曲ながら強めをあらわす。【新釈】「はつかよか」とルビ(大系も同じ)。六月二十日過ぎ。【全講】本文「……なりぬ」底本「なりぬる」の「る」を削つて文を結ぶ。【荻谷朴氏】(蜻蛉日記本文に対する対照法解釈の適用『国文学』昭和38年2月) 171頁「かくながら廿よ日になりぬる心ち、せむかた知らずあやしくおきどころなきを、」句読点の打ち

方が、全くユニークであることに注意していただきたい。本文が元来「なりぬる」と連体形であるものを、そこで句切るものが、既に間違っている。しかも、連体形の「なりぬる」を「なった。」と終止完了に訳することが、文法的（語脈的規準）に誤りであることはいうまでもない。だからこそ全講は、文法的な無理を避けるために、「る」一字を除去し、「なりぬ。」と終止形に改めたのであろうが、これこそは、本文批判の側から最も非難すべき恣意的改訂の過ちを犯したものと いわねばならない。

本文現在の形を認めて、連体形の「なりぬる」が「心ち」という名詞を修飾する位置にあるという明白な事実を、どうして素直に肯定認容することが出来ないものであろうか。全く理解に苦しむところである。

ところが、頭書のように、「かくながら廿よ日になりぬる心ち、せむかた知らずあやしきところなきを」とよめば、文法的（語脈的規準）にも正しいし、口調（口誦的規準）も安定する。そしてこのような形体的な正しい受け取り方が、本質的にも、作品を正しく理解する態度と一致するのである。即ち、ここでは、「かくながら廿よ日になりぬる」という「心ち」にかかると修飾句が、重要な意味を持っているのである。いうまでもなく「かくながら」という副詞句は、前節に「さながら六月になりぬ。かくて数ふれば、夜見ぬことは三十余日、昼見ぬことは四十余日になりけり」とあったのを受け

ている。そのように、夫兼家の来訪も杜絶えた閑淋しい状態が、六月にはいつてからも、下旬に到るまで続いたのである。作者の「そんな状態のままで廿余日になってしまった気持」というものが、如何に「やり切れない、どうにも落ち著かない」いらだったものであるかは察するにあまりあるものといえよう。こうした作者の心情を注視するのが対照法解釈の心理的規準というものである。晩夏の京都の暑苦しさというものも、勿論そうした作者の気持を更にいらだたせるものではあったろうが、そうした生理的条件は、決してここでは第一義におかれてはいない。この一章の中に、「心」二語、「心ち」三語が使用されていることが、作者自身の感情の問題を第一義として、取り上げていることを証明している。故に、全講のように「身の置き所もないので」と訳することは誤りとなる。

【注解】本文「……なりぬる（こゝち）。通説は「……廿余日になりぬる」で句点、ただし全講は、連体形で結ぶのを避けて、「る」を衍字とし、「……廿余日になりぬ」と改める。しかしながら、これは、萩谷朴氏が通説の文法的矛盾、全講説の改訂の恣意を退けて、「……なりぬる」を「こゝち」を修飾する連体形とされたのに従うべきであろう（関の山路あはれあはれとおぼえて——精舎日記本文に対する対照法解釈の適用——『国文学』昭和38年2月号）。すでに紀行解が「なりぬるのる」字衍が如し。哉の意……（前掲）とも考えながら、「又下のこゝちへ続きたるにもあるべし」と述べて、この読み方を提案

しており、また彰考館の句読点を辿ると、「かくなから、廿よ日になりぬるこゝちせむかたしらす。あやしく……」(玉上・柿本両氏『蜻蛉日記本文編』参照)となり、同じく学習院本で辿ると、「かくなから、廿よ日になりぬるこゝち、せんかたしらす、あやしく……」となる。これらの写本に点を施した古人は、現在のように「……なりぬる」で切って読んでいないことに注意したい。【全注釈】『紀行解』は、(A)る字衍か、(B)もし哉の意を含みたる辞か、(C)又下の「こゝち」へ続きたるにもあるべし、との三説を示す(前掲)。(C)を採るべきである。【新注釈】「はつかあまり」とルビ。新釈と同じ。【全集】「なりぬる」を直ちに「こゝち」へ続けて読む説に従う。そのように続けることで、ただ六月二十日過ぎになったという月日の経過を意味するだけでなく、前段における作者の心境と唐崎祓いとが、いかに内的なつながりをもつかが読みとれる。

○せむかた知らず 【紀行解】次々項参照。【講義】作者の心が憂鬱な上に、時は丁度真夏になったので、何ともいへず苦しく感ずるのである。【大系】どうにも我慢できないような鬱積した気持なので。訪れない夫を待って期待し幻滅し、嫉妬にさいなまれ閑怨にのたうち不断的緊張と不安に堪えられなくなつて、むしろ生理的な欲求から唐崎祓を思いたつ。【全講】気分が憂うつな上に、丁度真夏で何ともいえず苦しいので。【全評解】どうしようもなく。【集成】同上。

○あやしく 【川口氏】どうにも。【集成】妙に。

○おきどころなきを 【解環】とは、我心ながらおちつかぬさまなり。人々のあやしむばかりに、公よりうと／＼しくなりぬる事、上文を見合せて、女君の心をおしはかるべし。【紀行解】公の余に夜離の久しきを思化て心も坐に身も置所なき心ちのせらるゝなり。【講義】身の置き場所もないやうに感ずる。【川口氏】身のおき所もなく、我慢のならぬような鬱積した気持なので。絶えぬ物思ひといふせき暑熱にさいなまれて、我れながら物狂おしいほどに気分が晴れないので。【全講】身のおき場がない意。【全注釈】「おく」は処置する意。「こゝち」の始末のしようがないので。「恋しきも心づからわざなればおき所なくもてぞ煩ふ」(『中務集』)。「若き人々の心ちども、おき所なく見ゆ」(『源氏物語』初音)。「おき所なき物思ひつきて」(同・胡蝶)。【全評解】身の置き所がないので。【集成】何ともやりきれないので。

○いかで 【講義】「いかで(涼しき方もやあると)次の「思ひて」にかゝる。【川口氏】「いかで(心をこそ晴らさめ)」というほどの意。【全講】講義と同じ。【萩谷氏】次項参照。【注解】萩谷氏は「志賀の辛崎に祓えをして、現在の不幸な境遇、みじめな心境を、何とか幸運に振りかえたいというのが、作者の切実な念願である筈である」から、「いかで」は「涙づらの方に祓へもせん」にかかるのが「論理上当然の帰結となる」とされた(上掲論文—蜻蛉日記本文に対する対照法解釈の適用—『国文学』昭和38年2月号)。氏のいわれるとおり、「いかで」を直ち

に「涼しき方もやある」にかけて読む通説は誤っている。もちろん氏の説明でも明らかなごとく、作者の願望目的は、六月祓（夏越しの祓）をして「あやしきおきどころなき」心を何とか払いのけたい点にあった。したがって「いかで（心をこそ晴らさめ）」と、むしろ「いかで」に含みをもたせて読む解も考えられる（川口氏「かげろふ日記評釈・四『からさきのはらへ』」『国文学』昭和35年4月号）。たしかにそのような含みはあるけれども、それが文脈に働くほど、「いかで」に独立性があるとは思えない。萩谷氏説に従う。【全注釈】「祓もせむ」にかかる。【全集】同上。

○涼しき方もやあると 【講義】前項。【川口氏】「も」は祓えのために水辺に行けばどこか涼しい所でも、あろうかというように、婉曲に推量する意をあらわす係助詞で、疑問の係助詞「や」と複合する。【全講】前項。【萩谷氏】「いかで、涼しき方もやあると心ものべがてら、浜づらの方に祓もせむと思ひて、」前項にも述べたように、この章における主題は、作者の「やり切れないどうにも落ち着かない気持」の解決にあるのであるから、「いかで」という副詞が、何処にかかるものであるかは、自ら決定することである。これは、論理的規準の適用である。

通説は悉く「涼しき方もやある」にかけて、納涼銷夏を、作者の逢坂越えの主目的であるかの如く解しているが、実は、七瀬祓の名所である志賀の辛崎に祓えをして、現在の不幸な

境遇、みじめな心境を、何とか幸運に振りかえたいというのが、作者の切実な念願である筈である。故に、「是非」「何とかして」という強い願望をこめた副詞「いかで」が、主目的たる「浜づらの方に祓もせむ」にかかるものであることは、論理上当然の帰結となる。そして、挿入句としておかれた「涼しき方もやあると心をのべがてら」は、事のついでの副目的を示すものであって、接統助詞「がてら」の軽さが既にその事実を証明している。これは、論理的規準の適用と、語脈的規準の適用とが、同一の結論に達することを示すものである。対照法解釈の諸規準は、その適用が正しければ、必ず同一の解釈的結果に到達すべきであって、決して矛盾する結果を生むものではない。因みに、同じ係助詞であっても、「涼しき方も」の「も」と、「祓も」の「も」とでは、軽重の差があることを見のがしてはならない。【全評解】涼しい点。【集成】涼しいところでもあるかしらと。

○心も延べがてら 【講義】「がてら」は「それと共に」「そのついでに」といふ意の接尾語。祓が主ではあるが、そのついでに気晴らししようといふのである。【川口氏】気分をも晴らしがてら。【全講】気晴らしのついでに。【全評解】気を晴らしがてら。【対訳】鬱結した心をのばす。悲しい気持ちをまぎらわす。【集成】気晴らしかたがた。

○浜づらの方に 【講義】「浜辺」の意。【大系】水辺に出て。【川口氏】どこか水辺の方面で六月の祓えをしよう。祓の

